



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 33

May 2009

## 目次

旧分類地理学会会員の皆さまへ.....	2
新編集委員長あいさつ.....	2
諸報告	
日本植物分類学会第8回大会報告.....	2
大会参加の感想.....	4
日本植物分類学会第8回大会に参加して.....	4
第4回大会発表賞受賞者の決定.....	5
発表賞受賞者 喜びの声.....	6
日本植物分類学会2009年度第1回評議員会議事抄録.....	9
日本植物分類学会第8回大会総会議事抄録.....	10
2008年度事業報告, 2009年度事業計画について.....	12
会則第12条の変更について.....	12
庶務報告(2009年2月~4月).....	12
お知らせ	
臨時総会のお知らせ.....	13
第10回大会開催地の募集.....	13
学会メーリングリスト登録のご案内.....	13
国立科学博物館収蔵維管束植物タイプ標本データベース公開のお知らせ.....	14
寄稿	
学名のラテン語(1).....	14
本の紹介	
「サクラ ハンドブック」.....	15
「身近な植物に発見! 種子たちの知恵」.....	16
研究での失敗談	
道東へ!.....	16
いきもの便り	
コケの赤ちゃんのゆりかご.....	18
会員消息.....	19

## 旧分類地理学会会員の皆さまへ

会長 戸部 博

11 ページの第 8 回大会総会議事抄録にありますように、旧分類学会の名簿をもとに 50 年以上会員であった方を対象に、11 名を名誉会員として推薦し、承認が得られました。しかしその中には、名簿がないために旧分類地理学会から継続して 50 年以上にわたって会員であった方が含まれておりません。そこで、旧分類地理学会の会員に対して、自己申告を呼びかけたと思います。該当する会員の方は会計幹事までご連絡をお願いいたします。

## 新編集委員長あいさつ

永益 英敏

2001 年の学会統合から長く編集委員長を務められてきた岡田博氏（大阪市立大）の辞任により、4 月 1 日付けで日本植物分類学会の編集委員長を引き受けることになりました。私も 2007 年から英文誌 *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* の編集責任者を担当してきましたが、これより和文誌『分類』を含め、学会の 2 つの学術雑誌の編集に関する会務に対して責任を負うことになりました。

*Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* は年 3 回発行の英文誌です。今期は別に編集責任者を置かず、私が継続して編集にあたることにしています。電子投稿による受付、電子メールとデジタルファイルを利用した編集体制への移行により、審査にかかる時間と費用がかなり少なくなりました。また、『植物分類、地理』より通巻 60 巻となる今年度からは表紙が変わりました。編集委員の川窪伸光氏（岐阜大）によるデザインです。本文のスタイルもあちこち変更しています。しかし投稿が少

ないのが悩みで、今年度は特に少なくまだ 2 編しか投稿がありません。インパクトファクターの計算根拠となる Web of Science への登録申請も早急に行いたいと考えています。登録されれば投稿数も改善されると期待していますが、登録にも着実な出版状況が必要条件となりますので、会員のみなさまの積極的な投稿を期待します。

『分類』は年 2 回発行の和文誌です。今年度の編集責任者は西田佐知子氏（名古屋大）です。創刊時には和文誌の存続について悲観的な声が多かったのですが、学会賞記念論文やシンポジウム講演記録などを積極的に掲載するなど、歴代の編集担当者のご尽力により順調に出版されています。最近では原著論文や調査報告の投稿も増えてきました。

会員にとって有益で魅力的な学術誌の出版に努めて行きたいと思っています。投稿だけでなく、編集についてのご意見もお聞かせください。みなさまのご協力をお願いいたします。

## 諸報告

### 日本植物分類学会第 8 回大会報告

大会準備委員会 米倉 浩司

第 8 回大会を 2009 年 3 月 13 日より 15 日まで、仙台市内にある東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）で開催いたしました。会期中は幸運にも天気にも恵まれ、全国各地から 181 名の方々に集まっていただきました。

まずまずの成功をおさめることができたものと考えます。遠路はるばるご参加を賜りました皆様に深くお礼を申し上げる次第です。

どこでも共通する悩みですが、国立大学の法人化後、大学施設の使用料は高騰の一途となっています。前回、学会統合前の 2000 年

に仙台で行われた旧分類学会の第30回大会では大学キャンパス内の講義室と大学生協を使用することができましたが、統合に伴い参加人数の増えた今回の大会では大学施設の使用を断念せざるを得ませんでした。幸い、街中に位置する宮城県民会館の会議室と展示室を会場として借りることができましたが、当日になってみると会場の関係で設営や撤収に十分な時間がとれなかったのはやや計算外でした。

3月12日には、川内の東北大学植物園において編集委員会と評議員会が開かれましたが、植物園が冬季閉園中で会場への案内が十分でなかったためか、道に迷いそうになった参加者が出てしまったことは誠に遺憾でした。

13日から15日午前までは、口頭発表41題、ポスター発表44題の講演がありました。大会発表賞へのエントリーは、口頭発表15題、ポスター発表21題でした。例年通り大会発表賞にエントリーしている口頭発表を第1日目の初めに集めましたが、プログラムの編成に不行き届きがあり、大会前になって発表順番を入れ替える事態になって、関係各位に多大なご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。また、賞の審査のための会場として小部屋を確保することが難しく、やむを得ず口頭発表会場を使用する変則的事態となったことは、今後事前に注意を払わなければならないことといえるでしょう。事前準備ということでは、他にも、参加申込や講演要旨受理の返信がうまく届かなかったり、大会案内に掲載されている要旨の書式例がニュースレターに指定されている書式と異なっていて混乱を招く結果となったりするなど、反省点が多く目立つ結果となってしまいました。

2日目は午前中に一般の研究発表の続きがあり、午後は総会、学会賞、奨励賞、論文賞、発表賞の各受賞者が発表され、賞状と記念品とが授与されました。引き続き、日本植物分類学会賞を受賞された高橋正道氏ならびに奨励賞を受賞された山田敏弘氏、高山浩司氏および有川智己氏による受賞記念講演が行われました。もう一人日本植物分類学会賞を受

賞された太刀掛優氏は、ご高齢のため受賞講演は資料の配布をもって代えて欲しい旨の本人からの要望を容れました。その後、ポスター発表の続きが懇親会前まで行われました。

3日目には、午前中に一般の研究発表を行い、午後からは公開シンポジウム「東北地方の植物相の成り立ち」というテーマで、4氏による4題の講演と総合討論を行いました。東北地方ではまだまだ続々と新種が発見されており、さらに種分化などより深いレベルでの研究の紹介もあって、県内外から参加されたアマチュアの研究者や一般市民の方々も興味深く聞いておられたように思います。

懇親会は、2日目のポスター発表の後、大会会場から歩いて5分ほどの所にあるホテル仙台プラザにおいて行われ、126名の参加がありました。地元の酒店の協力により、県内でも入手困難な東北地方各地の地酒をそろえることができました。もっとも、料理に関してはもう少し地方色を出した方がよかったかもしれないという点、次回大会開催予定地からの挨拶など会の進行に不手際が見られた点など、反省材料も多々見られる結果となりました。

最後に、参加者の皆様に改めてお礼を申し上げると共に、会長をはじめ大会運営にご協力下さりました学会事務局の皆様、座長を快くお引き受け下さった先生方、シンポジウムで講演を快くお引き受けて下さった先生方、さらには大会運営に直接関わっていただいた多くの関係者の皆様には心から感謝いたします。どうもありがとうございました。



懇親会の様子 (撮影：米倉 浩司)。

## 大会参加の感想

山田 香菜子（首都大学東京）

2009年3月13日～15日、宮城県仙台市にて、日本植物分類学会第8回大会が開催されました。今回の会場となった東京エレクトロンホールは、仙台市の中心部に近いロケーションで、外には美しいケヤキ並木もあり、杜の都・仙台の雰囲気を感じることができました。連日、大会会場には多くの方が詰めかけ、日本中にこれほどたくさん植物分類に関心をもっておられる方がいることに驚きました。私はまだ研究を始めてから1年経っておらず、皆様にお見せできるだけの結果が出ていなかったので、今大会では発表はせず参加のみでした。もし拙いものであっても発表をしていれば、たくさんの方々から助言をいただけたのではないかと、と少し後悔しています。

口頭発表・ポスター発表では、研究材料もアプローチの仕方も様々な方の発表を聞くことができ、毎日が驚きの連続でした。私が特に興味を持ったのは、科博の海老原さんの、コケシノブ科の独立配偶体種に関する研究で

す。シダ植物が孢子体を作らず、配偶体だけで増えていく一植物の世界には、まだまだ私の想像を超えた現象が存在することを知り、うれしくなりました。また、受賞講演では、長きにわたり研究を続けてこられた諸先生方の研究に対する熱い思いをうかがい知ることができ、身のひきしめる思いでした。

そして、懇親会にも今回初めて参加させていただきました。たくさんの方の珍しい日本酒をいただきながら、日頃お会いする機会の少ない方も含め、いろいろな方と交流をもつことができました。年齢や職業に関係なく、野生植物を愛する人同士で盛り上がるのができた貴重な時間でした。

今回の学会で出会った皆様からは、自然を愛する心と研究にかける情熱を存分に感じることができました。私も熱意をもって研究に励みたいと思います。最後になりましたが、第8回大会のお世話を下さった、鈴木三男先生、米倉浩司先生をはじめ準備委員会の方々や、東北大学の学生・院生の方々に心より御礼申し上げます。

## 日本植物分類学会第8回大会に参加して

加藤 ゆき恵（北海道大学）

私は植物の世界に足を踏み入れて9年目なのですが、今回初めて植物分類学会大会に参加し、ポスター発表をさせていただきました。これまでも学会等で発表した経験は何度かありますが、どうもポスター発表というものが苦手で、しかも初めて参加する学会ということで緊張しながらコアタイムに臨みました。しかし蓋を開けてみると、入り口に一番近い場所だったためか予想以上に多くの方が来て下さり、2時間以上話し続けたせいで喉が痛くなるくらいでした。これまでの調査でお世話になった方に成果を報告することができ、また様々な方から貴重なご意見や情報を頂戴できて、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

他の方々の発表も、興味深く拝聴させてい

ただきました。全体的に分子系統解析や遺伝子塩基配列などの内容が多く、植生学が専門で日頃分類学の動向に直接触れることの少ない身としては、現在の主流はこういった分野なのだと再認識する良い機会となりました。また、一言で「分子」「遺伝子」と言っても様々な解析手法があることを知り、発表内容についていくのが精一杯、という何とも情けない状態でした。これまでは、自分の研究にも活かせる部分がありそうだと思います。分子といったものに対する苦手意識が強く、横目で眺めつつ時々つまんでみるような存在だったので、これを機に基礎から勉強したいと考えています。

懇親会も非常に楽しい時間でした。論文や著書で名前を見聞きしたことのある先生方が

たくさんいらっちゃって、お話をしてみたい  
 と思いつつも人見知りをする性格が災いし、  
 遠くから姿を拝見するに留まりましたが、同  
 じ空間にいただけでもとても貴重な時間を過  
 ぎしているなあ、と感じていました。これま  
 での調査等でお世話になった方や懇親会で紹  
 介していただいた方と色々とお話してきたこ  
 とも、とても嬉しく思っています。

学会最終日の一般公開シンポジウムはどの  
 方の講演も興味深く、特に分布に関する発表  
 は自分の研究のヒントとなる内容も多かった  
 ため、たくさんメモをとりながら聴かせてい  
 ただきました。また、私自身がこれまでに一

般向けの普及行事に携わる機会が時々あり、  
 いわゆる「研究者」ではない方との意識的  
 ギャップを度々感じるがあったため、総  
 合討論のテーマにあった、研究者と地域の植  
 物愛好家・研究団体の関係についての議論を  
 興味深く拝聴しました。

学会全体を通して日本植物分類学会の持つ  
 温かさを感じ、来年も是非参加したいと思  
 いました。最後になりましたが、第8回大会開  
 催に向けて準備をしてくださった鈴木三男先  
 生、米倉浩司先生を初めとする大会事務局の  
 皆様、東北大学の皆様、学会役員の皆様に厚  
 く御礼申し上げます。

## 第4回大会発表賞受賞者の決定

大会発表賞選考委員長 五百川 裕

第8回大会（3月13～15日開催）における研究発表を対象とした第4回大会発表賞は、  
 以下の5名（口頭発表部門2名、ポスター発表部門3名）に決まりました（各50音順）。

### 口頭発表部門

角川（谷田辺）洋子（科博・植物）「ゼンマイ類の種間雑種集団における遺伝的集団構造の解析」  
 土金 勇樹（日本女子大・理・物生）「接合藻ヒメミカツキモの生殖隔離：性フェロモン（PR-IP）  
 の認識低下による非対称な生殖隔離」

### ポスター発表部門

池田 啓（京都大・院・人間環境）「*PHYE* 遺伝子によるコメバツガザクラ (*Arcterica nana*) の  
 系統地理」

迫田 曜（日本女子大・理）「シダ植物リュウビンタイ、ゼンマイの野生配偶体は菌根菌をもつ」  
 佐藤 博俊（京都大・院・理）「屋久島におけるキノコ相とヤクシマザルのキノコ食について」

大会発表賞の授与式は3月14日の総会後に行われ、戸部会長から賞状と記念品が贈呈され  
 ました。記念品は大会準備委員会のご厚意により用意いただきました。

今回のエントリー数は、口頭発表15件、ポスター発表20件でした。過去3回は、前者が  
 16, 13, 13, 後者が18, 19, 28と推移していますので、総数で前回よりは減少しましたが、  
 活発にエントリーいただけており、この賞創設の目的の一つである、大会の活性化に充分寄与  
 しているものと考えます。また、このくらいのエントリー数までですと、審査方法や日程は、  
 前例を踏襲してスムーズに進めることができ、今回は、1日目のポスター発表時間を長めにとっ  
 ていただけたこともあり、選考委員の方々の審査の慌ただしさを軽減できたかと思います。選  
 考委員は、大会参加の評議員と会長に前回受賞者3名を加えた11名で、これは、専門領域の  
 違いへの配慮と、選考過程の透明性確保、そして、受賞者には選考の大変さを実感していただ  
 くこと等を考えた結果で、これまで同様、適当な委員構成であったかと思います。

審査方法も前回と変えずに、研究内容を5段階、発表のうまさ（ポスターの場合は視認性の良さのみで、口頭説明は評価外）を3段階で評価し、各選考委員の平均得点をもとに選考を行いました。選考委員が共著者の場合はもちろん、同じ研究室であったりする場合には、評価をしないこととしました。

受賞された発表は、研究内容が価値高いものであることはもちろんですが、それを伝える工夫が充分になされていました。研究の背景、意義を簡潔にわかりやすく説明して研究のポイントを伝え、聴衆に話の筋がイメージできるようにして、聞きながら（見ながら）無理なく理解していける構成になっていました。全体的にも、発表の工夫が良くなされていたと思います。大会発表賞創設のもう一つの目的である、発表の質の向上にも確実に寄与してきている印象を受けました。

大会発表賞選考にあたり、選考委員会、学会事務局および大会準備委員会の方々には、多大なご協力をいただきました。誠にありがとうございました。

## 発表賞受賞者 喜びの声

編集人（以下、編）こんにちは。先日の第8回大会では発表賞受賞おめでとうございます。まず、みなさん簡単に自己紹介をお願いします。

角川（以下、角）科博の筑波実験植物園で学振PDとして研究しています。溪流沿い植物であるヤシャゼンマイがどのようにゼンマイから進化したのかをその遺伝的背景を明らかにしたいと考えています。

土金（以下、土）日本女子大学・理学部・学術研究員、土金勇樹です。生物の種分化機構に興味を持ち、陸上植物にもっとも近縁な単細胞生物であるミカヅキモを、生殖隔離や有性生殖のモデル生物として扱い、実験を行なっています。

迫田（以下、迫）日本女子大学の迫田曜と申します。ポスター発表のときは理学部の4年でしたが、今は理学研究科のM1になり、日々研究と授業に励む毎日を送っております。私は野生のシダ植物配偶体、特に光合成能をもつ心臓形配偶体に内生する菌根菌について、観察と分子同定法を用いて調べています。そして、配偶体の形態進化と菌の関わりについて明らかにしたいと思っています。インドアよりもアウトドア派なので、野外で調査するのはとても好きです。

佐藤（以下、佐）菌根菌の隠蔽種とその共生樹種に対する宿主特異性についての研究を

しています佐藤です。今回は新たな試みとして、ヤクシマザルが毒キノコを識別できているかどうかをDNAバーコーディングで調べるという研究をやってみました。一見、異なる研究ですが、菌類の種多様性・菌類と他生物との相互作用を調べる点では共通したテーマです。今後も菌類を題材とした研究を発表していきたいと思うので、どうぞよろしくをお願いします。

池田（以下、池）京都大学人間・環境学研究所、瀬戸口研究室の池田啓です。博士課程の3年です。卒業研究以来、高山植物の系統地理学をやっています。最近は、植物の適応進化のメカニズムに興味をもっています。特に、系統地理から明らかになった遺伝的分化に伴い、こういった適応現象が起こっているかを、遺伝子と表現型の両方向から明らかにすることを目指しています。

編：では受賞が決まったときの率直な感想をお願いします。

池：え、マジで!?といった感じでした。すごく嬉しかったです。

迫：とにかく驚きましたが、非常に嬉しく思っています。

佐：いつかは取りたいと思っていた賞なので、実際に取れたことは非常に嬉しかったです。もっとも、昨年、博士論文の内容を発表し

たときよりも、今回1年だけでとったデータで発表した内容の方が受けがよかったのは少し複雑な気分でしたが。

角：とても嬉しかったです。でも、今年30代後半に突入、子供が2人いるママです。若手として受賞していいのかな？と戸惑いもありました。

土：素直に言えば、今日はおいしいお酒が飲めるな、と。

編：みなさん感想もいろいろですね。ではズバリ、受賞に際しての自信は？

迫：研究内容は自信を持って面白いと言えます！けれど、口にして説明するのが苦手なため、聞いて下さる方々にうまく伝えられるかどうかがとても不安で仕方なかったです。ですので、ポスターを作っている最中は自信作だと思っても、当日は頭がいっぱいいっぱい受賞については考えられませんでした。

佐：内容に関しては自分ではかなり面白いと思っていたのですが、キノコとサルの話なので、植物分類の方々にどれだけ評価していただけるかは不安ではありました。また、データも1年で取っただけのもので、データ不足を追及されたらそれまでだなという不安もありました。そういった意味で、取れる可能性はないわけではないが、決して高くないという程度に考えていました。結果として、予想をはるかに超えた好評価をいただけたので、非常に嬉しかったです。

角：日本植物分類学会での口頭発表は久しぶりで結構緊張しました。そのため、発表前は受賞のことなど考える余裕はなかったです。発表が終わった後は無事発表ができたので受賞に関してもちょっとだけ期待していました。

土：僕は滑舌が悪く、日常のコミュニケーションにも支障が出るほどでして、口頭発表には自信はありませんでした。ただ、今回報告した内容は自分では面白いと思っていましたので、僕の考えていることを伝えられるよう準備しました。

池：ポスター発表は苦手意識があったので、あまり自信はなかったです。面白い結果が出たものだなあ、という感触はありましたが、うまくプレゼンできるかという点ではあまり自信がありませんでした。なので、すごく嬉しかったです。

編：発表で特に工夫した点を教えてください。

土：スライドのデザインです。一枚あたりの情報量をなるべく少なくする作業をしました。削って削って形を作るイメージです。もう一つは壁に向かっての発音練習。

角：発表の内容は論文として投稿してmajor revisionのDecision letterをもらったばかりのものでした。せっかくReviewerにコメントを頂いたので、なるべくコメントを取り入れて発表スライドを準備しました。

編：なるほどですね。ではポスター発表についてはどうでしょう？

佐：なるべくシンプルなつくりにするように心がけました。いろいろと語りた部分もあったのですが、ごちゃごちゃすると誰も見てくれなくなるので、マニアックなデータはすべて削りました。深い部分に関しては、必要であれば口頭で説明しました。

迫：私の研究の一番のウリは分子レベルで配偶体に共生する菌根菌を調べたところにあります。ですので、系統樹を目立たせるため、写真よりもずっと大きく、バックを黒くすることで印象に強く残るようにしました。

池：結論を分かりやすく提示することです。ポスターを見ただけで、研究が分かるように表現することに。

編：では発表で大変だった部分はありますか？

土：あります。Keynoteでプレゼンファイルを作製しているのですが、それをPowerPointに変換するのが一番大変でした。

角：実験などで工夫した点を詳しく説明しようとしたり、今後の課題（これからの夢？）を語ろうとしたりすると時間オーバーになってしまいます。本当はもっと話したい！と思いながらも“研究から明らかになった

点を理解してもらうことが一番大切だ”と自分に言い聞かせて発表しました。

池：必要最低限のデータを見やすく大きく配置することです。ポスターだけで研究の面白さを伝えられるように、レイアウトすることに苦労しました。

佐：あまりよい意味で苦労したものがなかったような…。初歩的なミスですが、よく考えずにつけた発表タイトルが適切でないことにポスターの作成段階で気づいて、タイトルと発表内容のミスマッチを解消するのに苦労しました（結局、解決できていなかったのですが）。あと、さらにどうでもよいことですが、プリンターの調子が悪くてポスターをきれいに印刷できなくて困りました（これも解決できていなかったのですが）。くだらないことばかりですみません。

迫：私は初学会だったので、とにかくすべてが大変でした。

編：いやいや、読者の皆さんも身に覚えがあるかもしれませんね。最後にこれからの夢について語って下さい。

迫：大学4年での1年間は色々な野外調査地に行くことが出来ました。特に10月に行った沖縄県は初の亜熱帯調査だったのですが、もともと好きだった野外調査がさらに好きになるほど良い経験になりました。今後は日本を飛び出し、色々な国に調査に行ってみたいと思います。そして、多くの配偶体を採集しデータを集め、シダ植物配偶体の形態進化と菌根菌の関わりを解明していきたいと思います。

佐：まずは、こだわりをもつこと、それでいて囚われないこと、そういった研究スタイルを確立していきたいと思います。私は生き物好きから研究に入ったので、自分の好きな生物（菌類・キノコ類）の研究を続けるというのは一種のこだわりです。しかし、マニアックな研究に走っては自己満足に陥ってしまうので、他の研究材料を用いている研究者にも研究意義が分かってもらえるような研究をすることを心がけたいと思っています。また、一度手をつけた研究

テーマは自分が納得するまで追究していく一方で、新しい研究にも積極的に挑戦していく柔軟性を常にもってたいと思います。そうしたスタイルを貫いた上で、いつかは自分にしか見出せないような新発見をしたいなと思っています。ちょっと大げさではありますが…。

角：多くの遺伝子座を調べることによって、種分化のときにどのゲノム領域に強い自然選択圧がかかったのかを明らかにしたい！と考えて頑張っています。自分達で作成したEST配列のデータから分子マーカーを沢山開発して解析することにより、適応的な遺伝子を含むゲノム領域、もしくは適応的な遺伝子そのものを突き止めたいと思っています。

土：分類が出来る生理学者を目指したいと考えています。僕の研究の土台は生理実験です。生理実験を行なうには、実験材料の詳細を理解していなくてはならないと考えています。ある現象を明らかにするために、適した材料を選んだり、その逆で、その材料にしか出来ないことを行なうためです。そのためには分類学者の知識が必要ですが、ミカヅキモに関しては、僕自身がその知識を持てれば、と考えています。

池：世界中の高山植物を生で見たいです。そして、写真とDNAをとることです（笑）。

編：ありがとうございました。みなさんのそれぞれの夢に向かっての活躍を期待しています！



受賞者の右から角川（谷田辺）さん、土金さん、佐藤さん、池田さん、そして迫田さんの代理で今市先生。（撮影：梶田忠）



## 日本植物分類学会 2009 年度第 1 回評議員会議事抄録

庶務幹事 東浩司

会場：東北大学植物園・津田記念館

日時：2009 年 3 月 12 日 16:00～19:30

参加者

評議員：（）内は被委任者

出席（8名）：永益 英敏，黒沢 高秀，田村 実，五百川 裕，瀬戸口 浩彰，西田 治文，野崎 久義，  
邑田 仁

委任状出席（5名）：角野 康郎（議長），遊川 知久（議長），高橋 英樹（議長），藤井 紀行（議  
長），門田 裕一（議長）

幹事会：（）内は役職

出席（11名）：戸部 博（会長），東浩司（庶務），堤 千絵（会計），東 隆行（ニュースレター），  
坪田 博美（ホームページ・メーリングリスト），梶田 忠（植物分類学関連学会連絡会・日本  
分類学会連合），西田 治文（自然史学会連合），岡田 博（編集委員長），永益 英敏（英文誌編集），  
柏谷 博之（絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会委員長），村上 哲明（学会賞選考委員長）

欠席（4名）：秋山 弘之（図書），角野 康郎（絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員長），  
伊藤 元己（植物データベース専門委員会委員長），西田 佐知子（和文誌編集）

オブザーバー：藤井 伸二（次期大会準備委員会委員）

1. 評議員会開催にあたり，戸部会長から挨拶があった。
2. 東庶務幹事により，定足数が確認された。会長，評議員出席 8 名および委任状出席 5 名で，本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長に邑田仁氏が選出された。議事録署名人として，五百川裕氏と黒沢高秀氏が選出されたが，事後に五百川裕氏に代わり瀬戸口浩彰氏を議事録署名人とした。
4. 報告事項
  - 4.1 自然史学会連合関連報告 2008 年度活動報告および 2009 年度計画。
  - 4.2 日本分類学会連合報告 2008 年度活動報告および 2009 年度計画。
  - 4.3 植物分類学関連学会連絡会報告 2008 年度活動報告および連絡会主催 2009 年度シンポジウム計画。
  - 4.4 各種委員会に関する報告
    - (1) 編集委員会（編集委員長） 英文誌『APG』および和文誌『分類』の編集状況。ISI 登録未申請。印刷所の変更。「和文誌編集担当委員」を和文誌『分類』において「和文誌編集委員長」と記載する旨承認。
    - (2) 学会賞選考委員会 第 8 回日本植物分類学会賞の選考経過，課題。
    - (3) 論文賞選考委員会 第 3 回日本植物分類学会論文賞の選考経過，課題。
    - (4) 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会 現状説明と活動報告。レッドリストの補足説明文書作成（環境省から発表予定）
  - 4.5 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況。
  - 4.6 日本植物分類学会講演会報告 2008 年度実施，2009 年度準備状況。
  - 4.7 ニュースレターに関する報告 2008 年度発行状況，2009 年度発行計画。
  - 4.8 ホームページ・メーリングリスト関連報告 学会公式メーリングリスト移行・運用状況。

## 4.9 会務報告

4.10 会計報告 会員数状況, 会費納入状況。

4.11 その他 2009年度野外研修会について。2009年度日本・中国・韓国合同シンポジウムは中国で実施予定(10月)。CITES登録機関について。

## 5. 審議事項

## 5.1 2008年度事業報告(案)について

東庶務幹事より, 2008年度事業報告(案)が提案され, 1項目の削除・訂正が行われた後, 承認された。

## 5.2 2008年度決算報告(案)について

堤会計幹事より, 2008年度決算報告(案)が提案され, 質疑後, 承認された。

## 5.3 2009年度事業計画(案)について

東庶務幹事より, 2009年度事業計画(案)が提案され, 質疑後, 3項目の削除・追加が行われ, 承認された。

## 5.4 2009年度予算(案)について

堤会計幹事より, 2009年度予算(案)が提案され, 質疑後, 承認された。

## 5.5 会則の改定について

戸部会長より, 会則第12条2項の改定案が提案された。質疑検討後, 「役員は, 相互に兼任することはできない。ただし, 編集委員長と評議員の兼任を除く。」という会則第12条2項改訂文を総会議案とすることが承認された。

## 5.6 名誉会員の推薦について

東庶務幹事より, 会則第5条に基づき会員11名を名誉会員候補として総会に推薦することが承認された。

## 5.7 次期監事候補の推薦

会長より提案があり, 中村直美(茨城大), 綿野泰行(千葉大)の2名を監事候補として総会に推薦することが承認された。

## 5.8 その他

## (1) 第9回大会開催地について

東庶務幹事より, 愛知教育大の芹沢俊介・渡邊幹男氏, 人間環境大の藤井伸二氏のお世話で愛知県内において2009年3月26日から28日に開催することが提案され, 承認された。また, オブザーバー参加の藤井伸二大会準備委員会委員から大会開催地についての補足説明があった。

## (2) 総会議事について

東庶務幹事から, 2009年度総会議事次第(案)が説明され, 承認された。戸部会長より議長に邑田仁氏を推薦したいとの提案があり, 了承された。

**日本植物分類学会第8回大会総会議事抄録**

庶務幹事 東浩司

会場: 宮城県民会館(東京エレクトロンホール宮城) 601 会議室

日時: 2009年3月14日 13:10-14:10

1. 総会に先立ち戸部会長から挨拶があった。
2. 総会に先立ち鈴木大会会長から挨拶があった。

3. 東庶務幹事より総会出席者数が 81 名であることが報告された。
4. 邑田仁氏が議長に選出された。
5. 報告事項

#### 5-1 会務報告

東庶務幹事より、報告内容は第一号議案と同じであるので議案審議の際に報告するとの説明があった。

堤会計幹事より会員数は増加傾向であることが説明された。

最近逝去された学会員に対して黙祷が行われた。

#### 5-2 各委員会からの報告

##### ・編集委員会

岡田編集委員長より編集出版状況について報告があった。

##### ・学会賞、論文賞および大会発表賞選考委員会

総会後の表彰式で審査結果の報告を行うことが説明された。

#### 6. 審議事項

##### ・第一号議案 2008 年度事業報告書並びに 2008 年度決算報告書承認の件

前年度の事業報告と決算報告が東庶務幹事と堤会計幹事よりそれぞれ行われた。白岩監事より、会務及び会計が適切に行われているとの監査報告があった。審議の結果、異議なく承認された。

##### ・第二号議案 2009 年度事業計画案並びに 2009 年度予算案承認の件

東庶務幹事と堤会計幹事より上記二件について説明があった。審議の結果、異議なく承認された。

##### ・第三号議案 会則の改定について

会長より、会則第 12 条 2「役員は、相互に兼任できない」を「役員は、相互に兼任できない。ただし、編集委員長と評議員の兼任を除く」と改定したい旨説明があり、提案された。会員から、評議員は執行部をチェックする役目があるので、兼任した場合にそれをチェックするよう意見が出された。会長から執行部で対応する旨説明があった。挙手による採択を行った結果、賛成 75 票、反対 3 票で、出席者（81 人）の 3 分の 2 以上をもって可決された。

##### ・第四号議案 名誉会員の推薦について

会長より、会則第 5 条に基づき、次の会員 11 名を名誉会員とする推薦が行われた。

小林 艶子氏、桃谷 好英氏、浅井 康宏氏、浅野 一男氏、今江 正知氏、丸山 晃氏、小野 幹雄氏、菅沼 孝之氏、小山 鐵夫氏、岩月 善之助氏、清水 建美氏。

審議の結果、異議なく承認された。また、会長より、旧植物分類地理学会の会員動向について古い資料がないので、情報提供の呼びかけがあった。

#### 7. その他

##### 7-1 第 9 回大会開催地について

東庶務幹事より、次回大会を愛知県内において、愛知教育大学の芹沢俊介氏、渡邊幹男氏、人間環境大学の藤井伸二氏にお世話いただき、2010 年 3 月 26 日から 28 日に開催することが報告された。

##### 7-2 野外研修会開催について

東庶務幹事より、高知県立牧野植物園の田中伸幸氏のお世話により、高知県にて 5 月 15 日から 17 日に行われることが報告された。

### 7-3 ニュースレター掲載記事の著作権について

東庶務幹事より、これまで扱いが定まっていなかったニュースレター掲載記事の著作権について、出版物の著作権は学会で管理することを基本とし、ニュースレターについても学会として著作権を管理することになった旨報告があった。

### 7-4 メーリングリストについて

東庶務幹事より、2008年度より、民間サーバー会社と契約して、公式の学会メーリングリストを開設したので、2009年3月末から5月上旬をめどに、旧大会用に開設された暫定利用メーリングリストを停止することが報告された。

## 2008年度事業報告、2009年度事業計画について

庶務幹事 東浩司

ニュースレター No.32 に掲載した 2008 年度事業報告（案）、2009 年度事業計画（案）は、以下のような改訂の後、評議員会および総会で承認されましたので、報告いたします。

2008 年度事業報告（案からの改訂点）

- ・(4) の「第 x 回」を削除。

2009 年度事業計画（案からの改訂点）

- ・(4) の「第 x 回」を削除。
- ・(6) の「ホームページ等で」を「ホームページ、およびメーリングリスト等で」に修正。
- ・(6) 「・会員名簿の作成を検討する。」を追加。

## 会則第 12 条の変更について

庶務幹事 東浩司

2009 年度第 1 回評議員会および総会において会則第 12 条の変更が承認されましたので、報告いたします。これは、現行では編集委員長は他の役員と兼任することはできないが、その役務の特殊性・継続性から他の役員と兼任できるようにしたほうが学会運営において有益であると思われるための変更です。会則第 12 条 2 項は以下のように改定されました（下線部が追加されました）。

第 12 条 役員は、会員である個人の中から、別に定める選出の規定により選出する。

2 役員は、相互に兼任することはできない。ただし、編集委員長と評議員の兼任を除く。

附則 本会則は 2009 年 3 月 14 日より実施する。

## 庶務報告（2009 年 2 月～ 4 月）

庶務幹事 東浩司

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

- ・日本学術会議より依頼のあった、「知的財産政策検討のためのアンケート調査」に対して回答した（3月6日）。
- ・科学技術振興機構より依頼のあった、「論文誌の電子化に関するアンケート調査」に対して回答した（3月16日）。
- ・小野蘭山没後二百年記念事業会準備委員会より依頼のあった、小野蘭山没後二百年記念事業に対して協賛することを了承した（3月26日）。

## お知らせ

### 臨時総会のお知らせ

庶務幹事 東 浩司

今秋に予定されております日本植物学会大会（9月18日～20日：山形）に合わせ、日本植物分類学会臨時総会を開催することになりました。会員の皆様にはご参集いただきますようよろしくお願いいたします。詳しい日程につきましては、ニュースレター次号（8月発行予定）にてお知らせする予定です。

臨時総会における提案議題は以下のとおりです。

・2009-2010年度監事候補の承認について

これは本来、先の総会で提案されるべき案件でした。会員の皆様にはご足労をおかけして大変申し訳ありませんがよろしくお願いいたします。

### 第10回大会開催地の募集

庶務幹事 東 浩司

日本植物分類学会第10回大会（2011年）の開催地を募集いたします。大会開催にあたっては、講演会場（約150名収容可能な広さ）、クローク、本部、休憩室、ポスター発表会場等のスペースが必要となります。また、大会中に評議員会等の会議室をお借りすることになります。大会前の準備としては、大会案内と大会申込書の作成、プログラム編成、要旨集の編集・発行、懇親会会場の選定などがあります（大会準備に関するマニュアルが代々の大会準備委員会により引き継がれています）。大会運営は学会からの補助金（10万円）と参加費で行っていただきます。大会開催をお引き受け下さる（あるいは場合によっては引き受けても良い）という会員の方がおられましたら、2009年8月31日までに庶務幹事宛（下記）にご連絡をお願いいたします。ご参考までに、これまでの大会開催地（旧学会大会を含む）は学会ホームページ（<http://www.soc.nii.ac.jp/cgi-bin/jsps/wiki/wiki.cgi>）の「過去の大会プログラム」でご覧になることができます。

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科生物科学専攻 植物学系植物系統分類学学科内

日本植物分類学会事務局（庶務幹事 東 浩司）

TEL & FAX : 075-753-4125 e-mail : jimu@e-jsps.com

### 学会メーリングリスト登録のご案内

ホームページ担当幹事 坪田 博美

ニュースレターやWebサイトの不得意とする速報性の情報の配信を目的として設置された会員向け公式メーリングリスト ml-JSPS が2008年5月から運用されています。現在約130名程度の登録がありますが、未登録の方は是非登録をお済ませください。

登録希望の会員は、ml-reg@e-jsps.com まで必要事項を明記の上、ご連絡ください。なお、1週間経過しても登録完了の連絡がない場合は、お手数ですが再度ご連絡ください。

また、登録済みの方でも、メールアドレスの変更などがございましたら、随時ご連絡ください。

題名(Subject)「日本植物分類学会メーリングリスト登録希望」(必ず明記のこと)、氏名、所属、連絡先住所、電話番号、登録メールアドレス（ただし、携帯電話のメールアドレスは登録できません）

## 国立科学博物館収蔵

### 維管束植物タイプ標本データベース公開のお知らせ

海老原 淳 (国立科学博物館)

国立科学博物館植物研究部 (TNS) に収蔵されている維管束植物タイプ標本のデータベースをこのたび公開しました。以下の URL から検索・閲覧可能です。

<http://www.type.kahaku.go.jp/TypeDB/>

現在 2,375 点が高解像度の画像と共に登録されていますが、2009 年度以降さらに追加を予定しています。

## 寄稿

### 学名のラテン語 (1)

永益 英敏 (京都大学)

『国際植物命名規約』の翻訳や *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* の編集に携わるようになって、学名についての問い合わせや相談を受けることが多くなった。その多くはラテン語の知識が多少あれば解決するような簡単なものである。だが、ラテン語と聞くだけで腰が引ける人も多かるうし、辞書は文法の知識が全くないと引けないものでもある。これから勉強する人の参考となるように、学名のラテン語についてきわめて簡単な解説を試みたい。

以下、第何条等と書いてあれば、それは国際植物命名規約 (ウィーン規約) の条文である。

#### 学名はラテン語

学名はラテン語である。どうしてそうなのか知らないが、なんとなくそういうものだ、と思っている人は多いと思う。実は国際植物命名規約の原則 V に、はっきりと書いてある。

原則 V. 分類学的群の学問上の名、すなわち学名 scientific name, はその由来に関係なくラテン語として扱われる。

そういうわけで、学名はラテン語のアルファベットの文字で書かれなければならない (第 32.1(b) 条) し、不適当なラテン語の語尾を持っていれば正字法上の修正をされてしまう (第 23.5 条, 第 60.11 条など)。

#### 植物学ラテン語は古典ラテン語とは違う

植物学ラテン語は古典ラテン語を基礎とはしているが、新しく創られたり、本来の意味と異なる概念で用いられている学術用語だらけなので、まず語彙が大きく違う。だから普通のラテン語辞典はあまり役に立たない。そして、形態の記述を主たる目的としているので、ほとんどが名詞と形容詞 (現在分詞, 完了分詞など含む) しか出てこない。植物の記載に特化した、きわめてシンプルな人工的な言語と考えた方がよいくらいだ。植物学ラテン語をかなり勉強しても、けして『ガリア戦記』が読めるようにはならないし、古典ラテン語の専門家に植物の記載文を直してもらおうと思っても当惑されることになる (実話)。ただし、植物学の知識さえあれば、古典ラテン語に詳しい人には植物学ラテン語は難しくないはずである。

#### 参考書

Stern, W. T. 1992. *Botanical Latin: History, Grammar Syntax, Terminology and Vocabulary*, 4th ed. David & Charles, Newton Abbot.

歴史、文法、判別文や記載文の用例、用語、語彙など豊富。ペーパーバックもあって安く手に入る。英語での記載文の文例としても役に立つ。

- ・日本語の植物学ラテン語の本はたぶん今は手に入りません。
- ・日本語で書かれた古典ラテン語の文法書が1冊あるとよいでしょう。いくつか出ています。

(続く)

## 本の紹介

### 「サクラ ハンドブック」

大原隆明著, 新書判 88 ページ, 文一総合出版, ISBN978-4-8299-0181-6, 定価 1,200 円 (税別)

文一総合出版の自然観察ハンドブックシリーズの新刊である。このシリーズは、きれいな写真に専門家のポイントを絞った解説が加えられており、新書判で厚くならず、野外に持ち歩いて活用するのに便利である。「サクラ」は富山県中央植物園の大原隆明氏が執筆し、日本で分布がある程度広い野生の 11 種、および代表的な 52 種類の栽培品に絞って、それぞれの特徴と見分け方を解説してある。各見開きページ毎に花と葉の形態をきれいな拡大写真を適当に配して、見やすくまとめられており、これは今年の春は野外に持参してサクラをまじめに観察してみようという気にさせられた。その結果、いつもヤマザクラと思い込んでいた木が、カスミザクラの性質も少し持ち、雑種ではないかと思うようになり、ちょっと面倒になったが、そういうことにも気付かせてくれる有用なハンドブックである。付録として、日本全国桜名所 125 ヶ所 Map がついていますが、私の住所である上越市の高田城趾公園の桜は「日本三大夜桜」と称しており、NHK 大河ドラマ「天地人」の舞台となった「春日山城」と並ぶ上越市の数少ない全国区の観光名所かと思っていたが掲載されておらず、まだまだ認知度が低いことがわかった。なお、日本産サクラ属 (*Cerasus*) 各種については、「新日本の桜」(大場秀章他, 2007, 山と溪谷社) に変異や分類史も含めて詳説されており、サクラに興味を持たれた方には合わせてお薦めしたい。



(五百川 裕)

あなたも楽しく記事を書いてみませんか？

ニュースレターへの情報提供, 寄稿大歓迎です。

ご連絡は下記まで。

東 隆行

〒 060-0003 札幌市中央区北 3 条西 8 北海道大学植物園

TEL: 011-221-0066 FAX: 011-221-0664

e-mail: azuma@fsc.hokudai.ac.jp

## 「身近な植物に発見！ 種子たちの知恵」

多田多恵子著, A5判並製 160ページ, NHK出版, ISBN978-4-14-040230-6, 定価 1,400円(税別)

本書はNHK「趣味の園芸」に連載された「この植物にこのタネあり」を単行本化したものであるそうだ。著者の多田氏は、東京大学で理学博士を取得された後、植物の生き残り戦略や、虫や動物との関係を調査されているとのことで、その成果でもあるのだろう、身近な32種の植物を取り上げて、種子や果実（本書では「タネ」と表現している）の散布の仕組みを、わかりやすく親しみやすい文体で紹介している。さらに豊富な写真と模式図が理解を助けてくれ、本文を読まずとも楽しめるような構成となっている。内容には著者自身の見解によるものもあり、検証が必要なものも含まれるようではあるが、野外で実物の観察を重ねているからこそ、説得力を持って記載できるのであろう。実りの季節を迎える前に、本書を一読しておくのと、さらに植物観察が楽しくなるのではないだろうか。

＜紹介されている植物（本書の掲載順）＞

ユリノキ、ボダイジュ、アオギリ、シラン、ガガイモ、ムクゲ、ガマの仲間、メマツヨイグサ、ブラシノキ、ジュズダマ、メヒルギ、クサネム、ナンテン、カラスウリ、ジャノヒゲ、ヤドリギ、クサギ、ハゼノキ、エゴノキ、サルナシ、ケンポナシ、オニグルミ、ムクロジ、ドンダリの仲間、オオバコ、オオイヌノフグリ、オナモミの仲間、カタバミ、ゲンノショウコ、フジ、カラスムギ、タチツボスミレ



(五百川 裕)

## 研究での失敗談

### 道東へ！

福田 知子 (国立科学博物館)

その当時、私は“クロクモソウ”に夢中になっていた。

エゾクロクモソウ (*Saxifraga fusca* Maxim.) は、ユキノシタ科 *Micranthes* 節に属する植物である。花卉に葉緑体があるため、赤い花は赤黒く、白い花は緑がかって見える。東北から北海道には花茎に腺毛を持つエゾクロクモソウ、千島には花茎が無毛のチシマクロクモソウ (var. *kurilensis*) が分布する。北大の標本庫には、台紙いっぱい貼られた道東産のチシマクロクモソウの標本があり、その昔道東が千島と陸続きであったことを彷彿させた。

チシマクロクモソウはカムチャツカに分布する植物と関係が有る、と考える人もいた。

標本を見ているうちに、私はチシマクロクモソウが咲いているところを見たくてたまらなくなかった。しかし、問題はそこへは車でないと行けない、ということだった。免許を取ってから約10年、私はほとんど運転をしたことがなかったのである。でも、早く行かないと花が枯れてしまう！

長々と迷った末、ついに私は行くことにして、指導教官のT先生のドアをたたいた。「先生、レンタカーで道東に行ってきます。」



「あぶないねえ。」と先生は言った。「毎日、朝9時とか時間を決めて、連絡をもらえるようにするといいねえ。」

「じゃあ、もし連絡が無かったら、先生、心配して下さいませんか？」

「いやあ、どうせまた、連絡するのを忘れたんだろうと思うねえ。」

日頃が大事、とはこのことだ。

出発の日、朝一番にレンタカー会社に行った。事故についての怖い話を聞いた後、車の所に案内された。と、見ると、運転席の横にギアが無いではないか！

「これ、どうやって運転するんでしょう？」

こんなことを聞く人には、車は貸してもらえないのではないかと思ったが、係の人は丁寧に説明してくれた。ギアはハンドルのところについていた。10年前の記憶を辿りながら、私はブレーキとアクセルの位置を確認した。

路上に出ると、まさにラッシュアワーであった。右に曲がりたのに、どうしても曲がれず、何回も同じところをぐるぐる廻った。やっと右に曲がってしばらく走り、「岩見沢」の看板の方向へハンドルを切った。

まわりの車が急に少なくなった。走っているうちに、自分で運転しているのだ、という嬉しさが、私の中に沸き上がってきた。私は歌いだした。北海道の道は、どこまでも、広くてまっすぐだった。途中、何かが光ったが、「？」と思って通り過ぎてしまった（後で、違反車の自動撮影装置、と聞いて、真っ青になった）。

こうして、あちこちで道に迷いながらも、夕方までには、私は道東の宿にたどりつくことができたのである。

—・—

翌日、朝一番でチシマクロクモソウの標本が採られた川を訪れた私は、「ヒグマ出没中」の看板をみて震え上がった。今年、道東にヒグマが多い、と誰かが話していたのを思い出

した。それなのに、道東に行くというのに、私の頭はチシマクロクモソウのことでいっぱい、熊よけ鈴も熊スプレーも、何も持ってきていなかったのである。しかも、川岸とはヒグマが好んで降りて来る所ではないか。この川をどこまで遡ればチシマクロクモソウが生えているのかも、見当もつかなかった。こんなところで熊に食べられても、誰も気が付いてくれないだろう。どうしよう。私は途方に暮れて立ちすくんだ。

と、どこからか、白い犬があらわれた。尻尾を振ってこちらに向かってくる。「シロ！」と呼ぶと、飛びついてきた。首輪は無い。が、野良犬にしては、人懐こい。私はしばらく、目の前の問題を忘れて、この犬とじゃれ合った。そのうちに、ふと思った。「犬と一緒にいたら…?」。私は、川の方へ一歩、足を踏み出した。

犬は…ついて来てくれた！私の横を行ったり来たり、時々、川の水を覗き込みながら岸の石を飛び歩いている。そして、最初の角を曲がった時、私は思いがけず、「クロクモソウ」の大群落を目にしたのだった。後で道東を廻って分かったことは、道東では、クロクモソウの仲間は、本州のように高山に生えるのではなく、水辺という水辺に、雑草のように生えるということだった。私は岩に貼りついた1個体に目を近づけてみた。みずみずしい薄緑色の花茎に、毛は無かった。まぎれもない、チシマクロクモソウであった。

日本人で初めて千島で採集した宮部博士の言葉を借りれば、私はそこで「至福の時」を過ごした。帰りは、私も犬も、もうびしょぬれになって、来た道と一緒に車のところまで戻ってきた。しかし、サンプル整理のためにちょっと目を離れたすきに、犬はいなくなってしまった。さっき、私のところに来たように、今度は他の人に付いていってしまったのだろうか、それとも、実は飼い主が居て、連

れて行かれてしまったのだろうか？犬と一緒に食べようと思ったおにぎりを手にしたまま、私は後ろ髪を引かれつつ、道東最初の採集地を後にした。

私の最初のフィールドワークは、反省点だらけである。今なら、行く前に生育場所を詳

しく調べたり、フィールドの用意にももう少し注意を払ったりするだろう。それにしても、あの時犬が現れなかったら、私はどうしたのだろうか？思い出すたび、誰かが迷っている私の背中を押してくれたような気がして仕方が無いのである。

## いきもの便り

### コケの赤ちゃんのゆりかご

鶴沢 美穂子（東京大学）

いつでもどこでも、ひよいとしゃがみ込んでしまう。これはコケ屋の習性の一つのようなのです。目線を低くすると、コケの世界が見えてきます。手のひらより小さい緑の塊の中に何種も混生していることもザラです。その中ではダニやトビムシが動き回り、さながら小さな森のよう。さらにかがんで緑の塊を横から透かして見てみると、写真のような「胞子体」も見つかりやすくなります（図1）。細く頼りない柄の先に付いた丸い胞子嚢（蒴）を見つけると、その愛らしい形と、道端で人知れず懸命に子孫を残そうとしている健気さに、何か大切なものを見つけた気にさえなります。

コケ植物の胞子体は、シダ植物や種子植物



図1. コツリガネゴケ (*Physcomitrium japonicum*) の胞子体。高さは約2cm。(撮影：鶴沢 美穂子)

と違って、独立生活をするがありません。胞子体は、いわば「パラサイトシングル」。受精から胞子散布までの一生を、親元の配偶体から離れずに過ごすわけです。コケの胞子体は初め、ゆりかごのような配偶体の保護組織にすっぽりと包まれたまま育ちます（図2）。いずれこの保護組織は破れ、胞子体は外に飛び出すのですが、成熟して胞子散布ができる時までずっと、その下端はしっかりと親元の配偶体と繋がっています。胞子体は自分でもいくらか光合成をする能力があるので、栄養面でどの程度配偶体に依存しているのかはわかっていません。しかし、配偶体から離れると枯れてしまうこと、配偶体から胞子体への栄養輸送が行われていることは確かなようです。

陸上植物にもっとも近縁であると言われていたシャジクモ類の2n世代は単細胞です。それに対して、陸上植物は全て多細胞の2n世代を持ちます。2n世代の多細胞化は、植物の陸上化と同時に起こった大きなイベントの一つです。陸上植物の中で最も原始的と言われていたコケ植物。その胞子体が配偶体に依存的であるのは、多細胞の2n世代が誕生してから、高等植物のように独立生活を行うことができるようになる手前の、移行的な状態を残しているためなのかもしれません。この進化のロマンがぎゅっと詰まった「コケの赤ちゃんのゆりかご」に、私は卒業研究の時からすっかり虜になってしまいました。

足かけ4年、少しずつ面白いことがわかってつづつあります。蘚類を用いて形態形成の比較を行ったところ、どの種も配偶体の細胞を壊しながら孢子体が貫入していることが明らかになりました。快適なゆりかごを作るために、孢子体はかなり荒業を行っていたのです。その他の現象も、蘚類の中で普遍性が高いものが多いことが示唆されました。

まだまだ多くの謎が残されているのですが、コケ植物は実験室内で受精の誘導と孢子体の培養ができる種が極端に少ないため、データを得るためには地道な野外でのサンプリングが必要です。陸上植物の進化を育んだゆりか

ごに思いを馳せながら、今日も私は道端にしゃがんでいます。

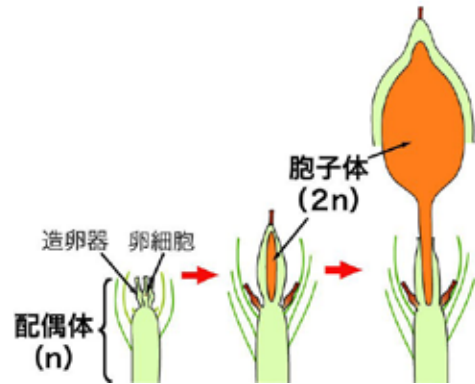


図2. コケ植物（蘚類）の孢子体の発達過程。